

二〇二四年度

二月二日午前入試

# 国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はつきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-14 まであります。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

転校をくり返してきた「わたし」は、なかなか友達を作ることができなかった。ある日、ママの「腹心の友」であるクラちゃんから食品サンプル風の消しゴムをもらった。新しい学校では、「いとちゃん」と「腹心の友」になろうとするがうまくいかず、わら人形を手に入れて、いとちゃんに呪いをかけようとした。しかし、ランドセルに入れていたわら人形がふとした拍子にランドセルから出てしまい、みんなに見られてしまった。「わたし」はわら人形を捨てようと川沿いにやってきたところで、クラスメイトの「滝島君」に会った。滝島君と話しながら、過去のことを思い出していた。

六年生になってすぐ、パパから転勤の話聞いた。ママもすごく喜んだけど、わたしもこんなにうれしい転勤報告は初めてだった。

①もう一度、新しい自分になれる。

今度こそだいじょうぶ。ずっと教室の隅すみつこから、たまきちゃんを観察してきたんだから。

わたしは、たまきちゃんになる。たまきちゃんになって、クラスの人気者になるんだ。

転校するたびに、わたしはわたしをアップデートしてきた。

四度目の転校は、ゴールドデンウィークが終わって、少しだった頃の月曜日だった。先生と教室のまえまで行くと、ドアの向こうがやけに騒がしかった。転校生がめずらしいのかなと、息を整えて先生のあとについていくと男子の声がした。

「細川、入院したって本当ですか。」

なんの話？

先生は、みんなに席に着くようにいうと、

「細川さんは虫垂炎ちゅうすいえんで金曜日に入院しました。でも心配はないって連絡れんらくがあったからだいじょうぶよ。」と  
いって、転校生のわたしの背中に手をあてた。

「日野恵めくみさんです。自己紹介じこしょうかいしてくれるかな。」

はい、とうなずいて顔をあげた。

「日野恵です。前の学校では『めぐぼん』って呼ばれてました。よろしくです。あ、お願いしまーす。」  
てへつと笑うと、教室のなかでくすくすと笑いが起きた。

天真爛漫てんしんらんまんな不思議ちゃん——。これが新しいわたし。

たまきちゃんならどうするだろう、って二日間考えた自己紹介なんだもん、まちがいない。もう地味なのはいいや、ほっちもいや。みんなに囲まれて、楽しく過ごしたい。

そのために考えた次の一手は、クラちゃんからもらったおもしろ消しゴムだった。とりあえず登校初日、一番かわいいイチゴパフェとロールケーキ、プリンアラモードの形の消しゴム三つを筆箱に入れておいた。ねらい通り、話しかけにきたふたりがそれを見つけて、「かわいいー!」「いいなー」と声をあげた。ふたりとも色つきリップをつけて、唇くちびるがてかてかしてる。

「あげよつか。」

「いっの。」

お団子ヘアの子が飛びつくと、となりのショートボブの子が「だめだよ」と、その子のシャツを引っばった。

「なんでだめなの？」

わたしは驚いた顔をして頭をかしげた。

「だって、人からもらうのは。」

「友だちでも？」

わたしがいうとふたりは、えっ？ と顔を見合わせた。

いきなり友だちはずうずうしすぎたかな、とひやつとしたとき、ショートボブの子がにっこりした。

「じゃあ、これもらうていい？」

「なら、あたしはこっち。」

わたしは「ほい」ってイチゴパフェとプリンアラモードをそれぞれの手のひらにのせた。

「あっ、ナカリンたちずるーい。」

他の子たちも集まってきた。

「ほしい？ ほしかつたらあげるよん。わたしんち、こういうのいっぱいあるんだ！ ほかにもねー、ラー

メンとパンパーションもあるんだっ。」

「マジで？ オレ、ラーメンほしい。」

男子も集まってきた。

「あげるよん。」

そういうと、みんなうれしそうな顔をした。その顔を見てわたしも気分があがった。友だちがうれしそうだと、わたしもうれしくなるんだ。初めて知った。

次の日も次の日も、わたしは二つ三つ消しゴムをもつていった。朝教室に入ると、「めぐぼん、おはよ。」って集まってくる。消しゴムのおかげで、わたしの周りにはたくさんの子たちが集まった。

アホっぽいしゃべりかたも、なれなれしさも、消しゴム一つでクリアして、わたしが少しおかしなことをいっても、「めぐぼんっぽいね」って、笑ってくれるほどになった。

不思議ちゃんキャラは、案外心地よかった。

ただ一つ気になっていたのは、町田良子さんが一度も声をかけてこないことだった。町田さんは一軍グループの真ん中にいるみたい人で、女子はもちろん男子もちよつと気をつかっているみたいなのがある。なんていうか、女王様、みたいな。

その町田さんの取り巻き女子たちも話しかけてこないけど、加賀さんや松井さんは、よくこっちを見る。きつと、消しゴムほしんだ。でも町田さんに気をつかって、こっちにはこれない。

③ 女子って、そういうめんどうくさいところがあるんだよね。

そんなかわいいそうな女子を救うために、金曜日、わたしは消しゴムをもって町田さんの席へ行った。

「好きなあげるよん。」

消しゴムの入っているきんちゃく袋の口を広げると、町田さんはすつと視線をあげた。

うわっ、きれいな子。

「いらない。」

……えっ？

町田さんは筆箱を開けて、小さな鏡を出すと前髪を指で梳いた。

わたしはつばを飲んで町田さんを見た。

「え、遠慮なんてしなくていいのにい。」

「しつこいよ。」

ぼそつと喋って町田さんは立ちあがると、廊下へ出ていった。

取り巻き女子の三人が「じゃま！」喋って、町田さんのあとを追いかけていった。

町田さんは危険だ。近づくな。

わたしのなかで、警報音が鳴った。

「あつ。」

滝島君の声にびくつとして顔をあげた。

「オレ、いいこと思いついた。」

なに？ 首をかしげると、滝島君はひざの上に置いていたわら人形を指さした。

「それ、寺にもっていけばいいんじゃない？」

「お寺？」

「人形供養とかいうやつ。使わなくなったひな人形とかぬいぐるみとかを焼いてくれるってホラーマンガで読んだことある。」

ホラーマンガって……。

「それ、お焚き上げのこと？」

それぞれ、と滝島君は数度うなずいた。

「でもこれ、人形でいいのかな。」

「わら人形っていうんだから人形じゃん。しかもわらって燃えるし、素材的にも問題なし。」

問題は、なし……かなあ。

「よし、決まり。」と、滝島君はもう一つ石を川に投げてから、自転車のところまでもどってスタンドを蹴った。

「花森公園わかるだろ、その向こう側に友尊寺って寺があるから行ってみろよ。」

④ そう喋ってペダルに足をかけてこつちを見た。

「日野って、ふつうにしゃべれんのな。こつちのほうがオレ話しやすい。」

じゃあな、とペダルを踏みこんだ。

「た、滝島君！」

キキッと、音を立てて自転車をとまると、驚いた顔で滝島君はふりむいた。

「今度から、滝島君って呼ぶね。」

⑤ わたしがいうと、滝島君はにっこり笑ってあごをあげた。

その顔を見たら、力がぬけた。

いままでわたし、なにをしていたんだらう。ムリをしてたまきちゃんのマネをして。それでも転校したばかりの頃は、それなりに楽しかった。みんなに囲まれて、ちやほやされて。人気者になるのは、わたしがずっと憧れていたことだから。

ママにも毎日たくさん友だちの話をした。

友だちが少ないわたしを、ママはずっと心配していたから。わたしが友だちの話をすると、ママはすごくうれしそうだった。なのに、転校からちょうど一週間が過ぎた日曜日、まじめな顔をしてママはわたしに喋った。

「めぐちゃん、うわべだけの友だちは、本当の友だちじゃないのよ。」

「いったいママはなにをいつているんだろう。わたしが A していると、ママはわたしの顔をのぞきこんだ。」

「大事なのは、特別な友だち。お互いになんでも話せて、その子のためならなんだってしてあげられるって思えるくらい、大切に思える、そういう腹心の友をもつことなのよ。」

あつ……。

「めぐちゃんは、お友だちができて、はなれちゃうとそこで終わっちゃうでしょ。それって本当の友だちとはいえないんじゃないかな。」

「だけど、だねママ……、わたしには本当じゃない友だちすらなかなかできないんだよ。」

「ことばにできないでいると、ママはわたしの手をにぎった。」

「あわてなくていいの。めぐちゃんが悪いわけじゃないんだから。」

「ほんと？ 本当にわたしのせいじゃないの？」

ママは笑みを浮かべてうなずいた。

「いままで転校ばかりだったもんね。やっぱり友情ってある程度の時間をかけて育んでいくものだから。」

「ママとクラちゃんもそうだった？」

「そうね。ママたちは一年生のときに出会って、それからすぐに仲よくなったけど、ママにとってのダイアナは、クラちゃんだって気づいたのは、小学三年生のときかな。」

「三年生……。」

わたしが三年生のとき仲よかった南ちゃんの話は、転校してからほとんど思い出すこともない。南ちゃんもきつとわたしのことなんて忘れていると思う。

「だいじょうぶ。めぐちゃんもきつと、めぐちゃんのダイアナに出会えるから。」

「そうかな。」

「そうよ。それに、もう転校はおしまい。来年はめぐちゃんも中学生でしょ。パパとも話したんだけど、もし次に転勤になったら、単身赴任にしようって。だからゆっくりでいいの。この子だって思える友だちに出会ったら、その思いを大切にね。」

ママはにこつとして、ダメ押しの一言葉を重ねた。

「腹心の友ができるといいね。」

腹心の友。そう、そうだった。大事なものは、わたしにとってのダイアナを見つけることだ。

いとちゃんに出会ったのは、次の日の月曜日だった。

虫垂炎で入院している子がいるとは聞いていたけど、すぐ変わった人だった。だって、退院したのになんなのリアクションが薄いとかが、入院中にだれもお見舞いに来てくれなかったとか、そんなみじめで恥ずかしくて隠したいことを、みんなの前で堂々といつて、しまいには、いまからでもお見舞いは受けつけるなんていつちやつて。

なにこの子、って思った次の瞬間、はっとした。

もしかしたら、この人は町田さんに責められているわたしを助けるために、あんな恥ずかしいことをいったんじゃない？

胸が高鳴った。

⑥ 細川さんは、わたしにとってのダイアナかもしれない。

だからがんばった。わたしのことを好きになってほしくて、一番の友だちになってほしくて、登校から下校までずっといっしょにいて、できることはなんだってしてあげた。わたしだけのいとちゃんでいてほしいから、いとちゃんが他の子と話をしているとすごくイライラした。他の子となると気になってしかたがなく、割りこんで、引きはなして、あとでさりげなくその子の悪口をいって。

そんなことをしたらさらわれるってことくらい、一年生でもわかることなのに、あのときのわたしにはわからなかった。

ただ、目の前にいる、いとちゃんがはなれていかないように必死で。

どこからまちがえたんだろう。

大事に大切に思っている腹心の友を、わたしは傷つけようとした。

早く、わら人形なんて手ばなさなきゃ。

土手をしばらく歩くと大通りに出た。その通り沿いを十分くらい進んで高架橋をくぐると花森公園が見えた。

転校してすぐの木曜日、ナカリンこと中瀬さんたち数人とあそびに行った公園だ。ナカリンたちはみんな、塾とかお稽古事をいくつもしているけど、木曜日はフリーの人が多からあそべるんだって聞いていた。またあそぼうねっていつてくれて、うれしかった。でも、いとちゃんというようになって、ナカリンたちとは目に入らなくなった。大切なのは腹心の友でほかはどうでもいい。ナカリンたちが話しかけてくるのがうつとうしくなかって、おぎなりに返事をしていうちに、話しかけてこなくなった。

そりゃそうだよね。

ぎゅっとカバンの持ち手をにぎった。

公園を突っ切ると私道のような細い道があって、その向こうに山門がある。両サイドにいる仁王さんが、こつちをにらんでいるように見えるのは、わたしがわら人形のような禍々しいものをもっているからなのか……。

目を伏せて門をくぐると、正面にお堂があった。<sup>⑦</sup>無意識に周囲に目を動かした。

だれもない。チャンスだ。

足早にお堂の正面の階段をのぼると、わら人形を賽銭箱の裏へ置いた。

ここに置いておけば、お寺の人が見つけてくれる。そうしたらきつとなんとかしてくれる。だれが置いたのかなんて、バレっこない。

ぎゅっと目をつぶって手を合わせた。

(神さま、じゃなくて仏さま？ ごめんなさい。よろしくお願いします。)

心のなかでつぶやいて踵を返した。階段をおりたところで顔をあげると、左側にある寺務所の前に人がいて、こつちを見ていた。あわてて顔を伏せて山門に足を向けたとき、名前を呼ばれた。

「やっぱり日野さんだ。」

目をこらすと、同じクラスの高峯理子だった。

恥ずかしそうに笑って近づいてくる高峯さんに一瞬身構えて、そんな自分自身にむっとした。

相手は高峯さんじゃないか。大柄で一見迫力はあるけどおとなしくて、そう、ジンベエザメみたいな子だ。ただ、いとちゃんと仲がいいっていうのは気にくわないけど。

「な、なにか用？」

一刻も早くここから立ち去りたいのに、よけいなことをいってしまった自分に舌を

「用ってわけじゃないんだけど、見かけたから声をかけただけ。日野さんちってこの近くなんだ。」

「近くはないけど。」

「そうなんだ。」

高峯さんはそれ以上なにをいうでもなく、にこにこしている。用がないならさっさと消えてほしいのに。まさかお参りするとかいわないでしょうね。いまお堂のところへ行ったら、あれに気づいてしまうかもしれない。

「高峯さんはなにしてるの?」

「うちはね、これ。」と、肩から斜めにさげたポシェットから白い袋をのぞかせた。

「お守り? え、でも閉まってるのに。」

お守りなんかを置いてる授与所に目をやった。

「閉まっているときでも、寺務所に行けばお守り買えるんだよ。」

寺務所というのは、書類を作ったり、電話を受けたり、事務的な仕事をする場所だ。

「日野さんは?」

「べつに……。ね、お守りって、なんのお守り?」

興味なんてなかったけど、話をそらしたくて高峯さんに話題をふりながら、山門へとうながすように足を向けた。

「親戚のお姉ちゃんにあげようと思って。」

「親戚の?」

「今度留学するから。」

「仲いいんだね。」

うん、と声を弾ませた。高峯さんって、学校ではおとなしい人だけど、案外話しやすいかも。

「うち、一人っ子だから、小さいときからお姉ちゃんによく相談とかしてるんだ。」

「親戚のお姉さんに? 相談とかって、友だちにするものじゃないの?」

⑨「そういう人もいるかもしれないけど、うちはお姉ちゃんが多いかな。」  
なんだ、なんだなんだ、そうなんだ!

わたしはすつと背筋を伸ばした。

「じゃあ、いとちゃんは高峯さんの特別じゃないってことだね。」

「特別?」

高峯さんは小さい目を **B** させると、目じりをさげた。

「うち、細川さんのこと大好きだよ。あんなふうにはなれないけど、うらやましいなって思うこともあるし。」

「うらやましい?」

「明るくって元気で自由で、人の目なんかぜんぜん気にしないっていうか。うちもあんなふうになれたらなって。」

そういって、ムリだけどと笑ってからだをゆすった。

⑩「だからね、日野さんの気持ち、うちにはちょっとわかる。」

「はっ。」

⑪ どころと熱いものがからだのなかにうごめいた。わたしの気持ち？ わかる？ なにいつてるの？ あんたみたいに、ぬぼっとした子と同じにしないで。

口にしそうになった瞬間、「だいいじょうぶだよ。」と高峯さんがわたしの手をにぎった。ちょっと湿り気のある大きくてすごくやわらかい手。ふりほどけなかった。

「細川さんは、いなくなったりしないから。」

「えっ?」

「それにね。」

高峯さんはまじめな顔をして声をひそめた。

「細川さんって、追いかけられるのになれてないんだと思うんだ。」

「そういえば……。滝島君をばたばた追いかけていった、いとちゃんを思い出した。」

目じりをさげる高峯さんと目が合った。

「やっぱりジンベエザメみたい。」

「高峯さんって、アップルパイ好き?」

「アップルパイ? うん、好き。大好き。」

わたしは、にぎられている手をほだいてカバンに手を入れた。

⑬ 「あげる。」と、フードパックを取り出して差し出すと、高峯さんは驚いた顔をした。

「やば、そうだった。高峯さんも消しゴムをほしがらないひとりだったんだっけ。」

「べ、べつに、これで高峯さんをつってるわけじゃないから。」

「そうじゃなくて。」

「毒も呪いも入ってないよ。」

ぐっとフードパックを押しつけると、高峯さんはそれを受け取ってなかを見た。

「二つはさすがにカロリーオーバーだから……。いっしょに食べない? うち、一応ダイエットしてるんだ、軽くだけけど。」

「ダイエットに軽いか重いかあるの?」

「べつに、いいけど。」

高峯さんと並んで公園のベンチに座った。アップルパイを一つずつ手に取ると、高峯さんは「いただきます。」と、がさっとアルミホイルをはがした。

「わっ、おいしい!」

「ホントだ。」

高峯さんとわたしは、もくもくとアップルパイをほおばった。

「ごちそうさまでした。」

高峯さんはアルミホイルを丁寧に折ってフードパックに入れると、ちらとわたしを見た。

「うち、本当はね、お姉ちゃんに留学なんて行ってほしくないの。心のどこかで、中止になればいいのって。」

「わざわざお守り買ったの?」

「うちがそんな風に思ってるの、お姉ちゃんにバレたくなかったから。でも、いまは八〇パーセントくらいは応援する気持ちになってるよ。アップルパイのおかげだと思う。」

「アップルパイの?」



「うん。おいしいものを食べると元気になるんだって。そういう力があるんだって、細川さんがいった。」  
「八〇パーセントだけど？」

高峯たかみねさんはくすつと笑って舌を出した。「はい」と空いたフードバックをこっちに向けた。「ありがとう」と、アルミホイルを入れると、わたしはベンチから立ちあがった。

「ごめん、用事思い出した。」

高峯さんはこくんとうなずいて、「じゃあね」と胸の前で小さく手をふった。

「じゃあ。」

踵かかとを返して、わたしはまっすぐに山門へ足を向けた。

わら人形わらにがたなんか頼たよって、自分のために人を傷つけようとしたわたしははずるい。そのうえ自分で捨てる勇気もなく、こっそりお寺に置いてきちゃうなんて、どこまでもわたしは卑怯ひきょうだ。

これまでずっとそうだった。いやなことから逃にげてきた。転校すればリセットできる、新しい自分になれる、そう思っていたから。

だけどちがった。リセットなんてできていなかった。わたしはニセモノの仮面をいくつもいくつも重ねていっただけ。その下にあるわたしは、なにも変わっていない。友だちを作るために、わたしは自分をいつわってきた。そんなわたしに本当の友だちなんてできるわけがない。だってわたしがニセモノなんだから。

わたしに必要なのは、ダイアナじゃない。必要なのは、本当のわたし。

お堂のまえまで来ると、心臓がばくばくした。

階段をあがって、賽銭箱さいせんばうの裏に手を伸のばした。

あった。まだ見つけられていなかった。<sup>⑭</sup>ホッとしたような、気が重いような……。

お堂に向かって頭をさげると、わら人形を胸むねに抱かかえて寺務所ていむじょへ向かった。

わら人形を供養くやうしてほしいなんていったら、叱しかられるかもしれない、卑怯な子だといわれるかもしれない、あぶない子だっと思われるかもしれない。どう思われるかを考えると、やっぱりこわい。

だけど。

かすかにバターと甘酸あまざすっぱいりんごの味が、口のなかに残っている。

「すみません！」

寺務所の扉とびらを叩たたいた。なかから物音がして「はい」と低い男の人の声が聞こえた。

足音が近づいて来る。

深く息を吸って、顔をあげた。

<sup>⑮</sup>わたしは、もう逃げない。

(いとうみく『ちいさな宇宙の扉のまえで』)

※(注)

たまきちゃん

「わたし」が四年生の時にいた小学校で、クラスの中心的存在だった女の子。

ダイアナ

『赤毛のアン』の主人公「アン」の大親友の名前。

問一——線①「もう一度、新しい自分になれる。」について次の1・2の問いに答えなさい。

1 「新しい自分」とありますが、「わたし」はクラスでどのような立場になろうとしたのですか。文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

2 「新しい自分」になるために、「わたし」はどのようなキャラを演じましたか。文中からぬき出して答えなさい。

問二——線②「その顔を見てわたしも気分があがった。」とありますが、なぜ「気分があがった」のですか。解答らん「を知ったから。」につながるように簡潔に答えなさい。

問三——線③「そういうめんどくさいところ」とありますが、ここでの「そういうめんどくさいところ」とはどのようなところですか。本文の言葉を使って答えなさい。

問四——線④「日野って、ふつうにしゃべれんのな。」とありますが、「わたし」はふだんどのような話方をしていたのですか。文中から十字前後でぬき出して答えなさい。

問五——線⑤「その顔を見たら、力がぬけた。」とありますが、「力がぬけた」のはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 人気者になろうと一生懸命努力してきたが、滝島君に言われて自分にはその資質がなく無駄なことだとわかったから。

イ 人気者になろうと一生懸命努力してきたが、滝島君と話すことで無理をして人気者になろうとしなくてもいいんだと思ったから。

ウ 人気者になろうと緊張感をもって過ごしてきたが、滝島君の変な顔を見て一気に気持ちが悪くなってしまったから。

エ 人気者になろうと緊張感をもって過ごしてきたが、滝島君と話しているうちに人気者にもつらいことがあると知ったから。

問六  Aにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア きよとんと      イ ほそとと      ウ にっこり      エ うっかり

問七 — 線⑥ 「細川さんは、わたしにとってのダイアナかもしれない。」とありますが、「わたし」はなぜ「細川さん」が「わたし」とってのダイアナ」だと思ったのですか。次のア～エの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「細川さん」が町田さんに責められている「わたし」を見かねて、「わたし」から注意をそらすためにわざと恥はずかしいことを言っているのではないかと考えたから。

イ 「細川さん」が町田さんに責められている「わたし」を見かねて、自分の方が目立つことで町田さんのいじめの標的になろうとしているのではないかと考えたから。

ウ 「細川さん」が町田さんに責められて注目を浴びている「わたし」を見て、「わたし」をねたんでみんなの気を引こうとしているのではないかと考えたから。

エ 「細川さん」が町田さんに責められて注目を浴びている「わたし」を見て、いじめの愚おろかさを見んなに伝えようとしているのではないかと考えたから。

問八 — 線⑦ 「無意識に周囲に目を動かした。」とありますが、なぜですか。三十字前後で答えなさい。

問九 — 線⑧ 「舌を□。」とありますが、□にあてはまる語として最も適切なものを次のア～

エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア たたく イ 巻く ウ なめる エ 打つ

問十 — 線⑨ 「なんだ、なんだなんだ、そうなんだ！」とありますが、この言葉からは「わたし」のどのような気持ちを読み取ることができますか。次のア～エの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「わたし」はなかなか友達ができず、さびしい思いをしていたが、それは自分だけでなくみんな同じなんだと少しほっとする気持ち。

イ 「わたし」は細川さんと高峯たかみねさんは大親友だと思っていたが、実はそうではないということがわかり、人間関係は他人にはわからないものだと思議ぎがる気持ち。

ウ 「わたし」は高峯さんが細川さんと一緒にいっしょにいることをねたんでいたが、二人が何でも相談しあう仲ではないとわかり、細川さんと親友になれるかもしれないと期待する気持ち。

エ 「わたし」は高峯さんが細川さんを信頼しんらいしていると思っていたが、高峯さんは細川さんと親友でない<sup>わ</sup>とわかり、性格に裏表のある高峯さんを怖こわいと思う気持ち。

問十一 □ Bにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア にこにこ イ ちらちら ウ しょぼしょぼ エ ばちばち

問十二——線⑩「日野さんの気持ち、うちにはちょっとわかる。」とありますが、「高峯さん」は「わたし」のどんな「気持ち」がわかるというのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア クラスの中心的存在である細川さんに嫌われたら怖いと思う気持ち。
- イ 細川さんをひとりじめしようとして必死になってしまう気持ち。
- ウ 細川さんに町田さんとの仲を取り持つてほしいと思う気持ち。
- エ 新しい学校の雰囲気になかなかなじめないことを不安がる気持ち。

問十三——線⑪「どろっと熱いものがからだのなかにうごめいた。」とありますが、「熱いもの」とは何だと考えられますか。次のア～エの中からあてはまらないものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 嫌悪感
- イ 反感
- ウ 怒り
- エ 嫉妬

問十四——線⑫「ふりほどけなかった。」とありますが、「わたし」が「高峯さん」の手をふりほどけなかった理由としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 急に手をにぎってきた高峯さんの意図がわからず、恐怖のあまり体が固まってしまったから。
- イ 高峯さんの手から予想外の優しさと包容力を感じ、むやみにこぼむことができなかったから。
- ウ 高峯さんのまっすぐで純粹な勢いにおされてしまい、気持ちをくじかれてしまったから。
- エ 急に手をにぎってきた高峯さんに対し、どのように反応してよいかわからなかったから。

問十五——線⑬「やば、そうだった。」とありますが、「わたし」はどのようなことを心配したのですか。それを説明した次の文の□にあてはまるように、文中の言葉を使って答えなさい。

高峯さんに□と想われて、アップルパイを受け取ってもらえないのではないかと心配した。

問十六——線⑭「ホッとしたような、気が重いような……。」とありますが、この時の「わたし」の気持ちを説明した次の文の□ 1・2にあてはまる言葉を、□ 1は十字以上十五字以内で、□ 2は五字以上十字以内でそれぞれ文中からぬき出して答えなさい。

「わたし」はわら人形が□ 1 ことに対しては安心したものの、寺務所に行ってわら人形の供養を頼んだ時に□ 2 という不安もあったから。

——線⑮「わたしは、もう逃げない。」とありますが、「わたし」はどのような行動をする決意をしたと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「腹心の友」はそう簡単に見つかるものではないので、それまではクラスの中で目立たないようにし、我慢して一人でひっそりと生きていこうという決意。

イ 孤独から逃れるために表面的な人間関係を結ぼうとするのではなく、自分ともクラスのみんなともきちんと向き合うことで信頼関係を築いていこうという決意。

ウ 「わたしにとってのダイアナ」である細川さんが振り向いて親友になってくれるまで、自分の気持ちを持ちをいつまでも伝え続けていこうという決意。

エ わら人形を持っていたことでクラスのみんなから非難されて、いじめられているが、自分が招いたことであり、甘んじてそれを受け入れようという決意。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

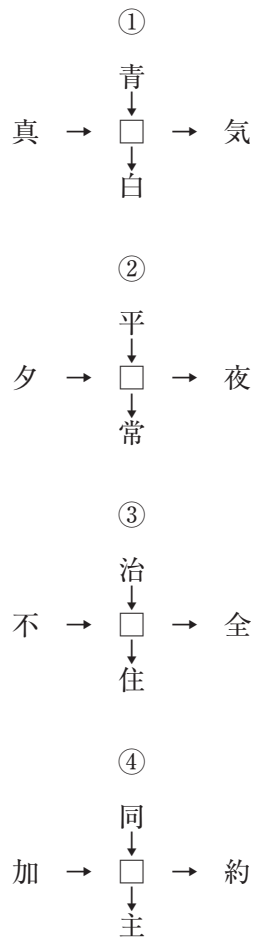
問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 色のタイシヨウがあざやかだ。
- ② 的を矢でイる。
- ③ おおよそのケントウをつける。
- ④ セーターをアむ。
- ⑤ 病気がカイホウに向かう。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 志半ばであきらめてはいけない。
- ② 山の頂にのぼる。
- ③ 時を刻む時計。
- ④ 雨具を買う。

問三 次の①～④の□にそれぞれ漢字一字をあてはめ、矢印の方向に読むと二字の熟語となるようにしなさい。



問四 次の①～④の文の——線部の慣用句の意味を、それぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 運動会が終わってから、砂をかむような気持ちで過ごしている。

- ア くやしくてたまらない
- イ 味わいやおもしろみがない
- ウ 怒りがおさえられない
- エ つらくてこらえられない

② 先生の言葉に私はかぶりを振った。

- ア 承知する
- イ 理解する
- ウ 否定する
- エ がまんする

③ 彼女は私の気が置けない友人の一人だ。

- ア 信用して任せることが難しい
- イ 人に対して気を配ることが得意な
- ウ 落ち着いて話すことのできない
- エ 心からうちとけることのできる

④ 彼が副部長では、役不足に感じる。

- ア その人の能力が与えられた仕事とずれていること。
- イ その人の能力が与えられた仕事よりも高いこと。
- ウ その人の能力が与えられた仕事よりも低いこと。
- エ その人の能力が与えられた仕事に合っていること。